おじいさんと不思議なマッチ箱

Etsuko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おじいさんと不思議なマッチ箱

【Ｎコード】
Ｎ５１１４Ｆ

【作者名】
Ｅｔｓｕｋｏ

【あらすじ】
おじいさんの宝物はマッチ箱のコレクション。マッチを擦ると不思議なことが起きるのです。※小学生低学年くらいから読んで欲しい童話ですが、ここでは漢字の多いままにしました。

〈1〉

ある町のある家に、一人で暮らしているおじいさんのお話です。

おじいさんは古いマッチ箱を集めるのが好きでした。

きれいなラベルがついている昔のマッチ箱をたくさん持っています。

今はマッチを使う人が少ないので、おじいさんはそれらのマッチを古風な雑貨を置いているお店や、古道具屋さんや、昔ながらのたばこ屋さんで買ったのでした。

おじいさんはパイプたばこを吸うときに、宝箱に入れたたくさんのマッチ箱をながめて、どれか一つ選んでマッチを擦ります。

そのとき不思議なことが起きるのです。

マッチの火が照らす明かりの中に、マッチラベルの絵の中の人や動物や物が現れて、おじいさんとお話ししてくれるのでした。

それはそれは不思議なことでしたが、おじいさんはそのことを誰にも話しませんでした。

自分一人の楽しみにしたかったからです。

ある日、おじいさんは庭仕事を終えて、晩ごはんもすますと、いつものようにマッチを選びました。

中国娘がきれいな花を摘んでいる絵のマッチです。

パイプを用意してマッチを擦ると、明かりの中に中国娘が現れました。

「お嬢さん、そのお花をどうするんだい？」とパイプに火をつけながらおじいさんは聞きました。
「私は宮殿の召使いなの。このお花はお妃様のお部屋に飾るのよ」
娘が花を入れた籠を見せながら答えました。
「そうかい、とってもきれいなお花だね」
「シャクヤクって言うのよ。お妃様が一番好きなお花なの」
「そうかい、そうかい。ところで、」
おじいさんがもう一言言いかけたとき、マッチの火は消え、中国娘も消えてしまいました。
おじいさんはもう一言、「君は小さいのにお仕事をしてて偉いね」とほめてあげたかったのでした。

その次の日、おじいさんは寝る前に一服したくなり、パイプを用意するといつものようにマッチを擦りました。今度はロシアの熊が木の実を食べている絵のマッチです。
マッチに火がともり、熊が現れると、おじいさんは急いで話しかけました。
「やあ、君は木の実が好きなの？」
熊が妙にイライラしながら答えました。
「好きも嫌いもないわ。とにかく何でも食べなくちゃ。もうすぐ冬が来るのよ。冬眠前にいっぱい食べなくちゃいけないの。お腹に赤ちゃんがいるから、赤ちゃんの分まで食べるのよ。
あら、おじいさんも食べられそうだわ」
大変、腹ぺこの熊がおじいさんを食べようと大きく立ち上がりました。
慌ててておじいさんがマッチの火を吹き消すと、熊の姿は消えました。
「ああ、今日は危なかった。インドの人食いトラのマッチを擦ったとき以来だよ」
ホッとしたおじいさんはパイプに火をつけるのを忘れていたこと

に気付きました。

「やれやれ、寝る前にドキドキしては体に悪い。今度は大人しそうなのに話しかけてみよう」

おじいさんはたくさんのマッチから慎重に選び、花や、蝶々、娘の絵のマッチを机に並べました。

「この娘さんに話しかけてみようかな」

おじいさんが選んで手に取ったマッチは、日本の娘の絵がついていました。

日本娘はきれいな着物を着て、立派に髪を結い上げ、扇をもってにっこりとしています。

それはとてもきれいな娘でした。

おじいさんは何だか嬉しくなり、そのマッチを擦りました。

するとどうでしょう。明かりの中に現れた娘は、おじいさんを見るとにっこりして、自分から話しかけてきたのです。

「私、さゆりよ。旦那さん、立派なおひげねえ。とてもすてきよ」

「そうかい、それはありがとう。君はもうお仕事をしているの？」

「ええ。私は芸者よ」

「ああ、ゲイシャ・ガールなんだね。どんな仕事だろう。踊ったりするんだろうね」

「ええ、踊ったり、歌ったりするのよ」

さゆりは袖で口元を隠しながら「うふふ」と笑いました。

おじいさんはその姿にみとれました。着物も立派な髪形も素晴らしく、何よりしぐさがまるでバレリーナのように優雅で、笑った切れ長の目もとても美しい娘だったからです。

見とれてる間に、マッチは燃え尽きて、さゆりは消えてしまいました。

パイプたばこに火をつけるのも忘れました。

おじいさんは、どうしようかオロオロと迷い、

「どうせパイプに火をつけなきゃいけないんだ」
と自分に言い聞かせて、もう一度そのマッチを擦りました。

さゆりが現れて「あら、旦那さん。またお会いできて嬉しいわ」とお世辞を言ってにっこりしました。
お世辞と分かっていてもおじいさんはとても嬉しかったのです。それはさゆりの声がとてもきれいで明るかったからでした。
「お嬢さん、」
「なあに？　さゆりでいいのよ、旦那さん」
「じゃあ、さゆり。もっと君とお話がしたいんだが、マッチの火がすぐ消えてしまうんだ」
さゆりはまた「うふふ」と笑って言いました。
「いい方法があってよ。そのマッチの火をロウソクに移すの。そうすればロウソクが燃える間、長くお話ができるわ」
また火が消え、さゆりも笑顔のまま消えてしまいました。

「そうかロウソクか。そういう手があったんだな。明日ロウソクを探してみよう」
結局またパイプたばこを吸い損ねましたが、おじいさんはわくわくしながらベッドに入って眠りました。

〈二〉

また次の日、おじいさんはそわそわし、いつもならていねいに時間をかけてやる庭仕事を、おざなりに手早く済ませました。庭の花々に水だけやってしまうと、ロウソクを探しにかかりました。

「あった、あった。これだ」

家の中のあっちをひっくり返し、こっちをひっくり返しして、ようやっと見つけたのは、きれいな花模様が描かれた絵ロウソクです。それは昔、日本に旅をした友達がおみやげでおじいさんにくれたものでした。その友達も今はもういません。

そのことを寂しく思い出しながら、おじいさんはロウソクの絵をながめました。

「大事にとってあったが、せっかくだから使わせてもらおう。こんなにきれいなら、さゆりをもてなすのにもぴったりだ」

そうひとりごちて、ひっくり返した部屋をきれいに片づけると、おじいさんはきれいな服に着替えてひげの手入れもし、すっかり格好良くしてから、さゆりのマッチを擦りました。

現れたさゆりは袖の後ろであくびをかみ殺して、何でもないかのようににっこりしました。

おじいさんは急いでマッチの火が消えないうちに、火をロウソクに移しました。

火がともると絵ロウソクの花は夢のようなきれいさです。

「おはよう、旦那さん。また呼んで下さったのね。嬉しいわ」

さゆりは本当に嬉しそうに言いました。
「今ごろおはようなのかい？　何だか眠そうだね。もうお昼はとうにすぎたよ」
おじいさんはさゆりが寝ているところを起こしてしまったのかと思って心配になりました。
「あら、大丈夫よ。夜が遅い仕事だからお昼まで寝てるけど、もう起きる時間なのよ。ちょうどよかったわ。
それより、なんてきれいなロウソクでしょう。私のために用意して下さったのね？　とっても嬉しいわ」
「そうかい、喜んでくれて嬉しいよ」
おじいさんはさゆりが喜んでくれて、飛び上がらんばかりに嬉しかったのですが、何でもないかのようなふりをしました。
「それに今日の旦那さんはとっても素敵な格好だわ。私、おしゃれな人大好きよ」
「そうかい、ありがとう」
おじいさんは心の中で照れていました。でも、やっぱり、それは顔に出さず何でもないかのように言いました。
「ロウソクのお礼に一差し舞いましょうか。旦那さん、見ていて下さいましね」
「それはいい。ぜひ見たいよ」
さゆりは、やっぱりにっこりとして、着物に差していた扇をとって広げると、それをひらひらとさせながら、歌い踊りました。明るい調子の歌を口ずさみながら、軽々と袖を舞わせ、手を舞わせ、扇を蝶々のように舞わせます。さゆりの踊りはとても素敵でした。
さゆりが扇をとじて「お粗末さまでした」と頭を下げて挨拶をしたので、おじいさんは思わず拍手しました。
「なんて素晴らしい！　さゆりは踊りがとても上手なんだね」
「あら、嬉しいわ。でもモダンダンスは下手なのよ。お客さんに誘われてダンスホールに行ったけど、振り付けを間違えて相手の方の足を踏んじゃったわ」

「それは、私の国のダンスかな？」
「そうそう。西洋ダンス。あれ、難しいのねえ、今度教えて下さいな」
　おじいさんは顔が赤くなってしまいました。さゆりのきれいな手を取って踊るのを想像したら、とても恥ずかしかったからです。
「いや、私はダンスが苦手でね」とごまかして答えました。
「あら、でも私よりきっと上手いに違いないわ。意地悪言わないで教えて下さいな」
「いやいや、とてもとても、踊りの上手なさゆりに教えるのは恥ずかしいよ」
　それはおじいさんの正直な気持ちでした。だって、さゆりの踊りは本当に素晴らしかったのですから。
「あら、いやだ。もうお座敷の時間だわ。ごめんなさい、旦那さん。私もうお仕事に行かないといけないの」
　さゆりが慌てて、そして残念そうに言いました。
「さゆりのお仕事はお座敷って言うのかい？　気にしないでいってらっしゃい」
「ねえ、また呼んで下さるでしょう？　お昼過ぎなら暇ですから、またマッチを擦って下さいね。約束よ」
「分かった、約束しよう。またマッチを擦るよ」
　さゆりがお別れのお辞儀をして「じゃあまたね」と言ったので、名残惜しかったのですが、おじいさんはロウソクに息を吹きかけて火を消しました。

　火が消えるとふっとさゆりの姿は消え、部屋が暗くなりました。
「おっと、もうお日さまが沈んだんだ。晩ごはんの支度を忘れていたぞ」
　おじいさんの言う通り、もう日が暮れて晩ごはんの時間になっていました。今からお料理をする気になれません。おじいさんは仕方なく朝ご飯の残りのパンにハムを挟んで食べました。

〈三〉

次の日、おじいさんはさゆりのマッチを擦りませんでした。
また次の日もさゆりのとは別のマッチを擦りました。そうしていつものように花や虫に一言二言話しかけて、パイプたばこを吸いました。
おじいさんは、本当はさゆりにとても会いたかったのですが、さゆりがお昼に起きてから、夜お座敷に出るまでのほんのわずかな時間を、自分のために使わせては悪いと思い、我慢したのです。

（なに、私にだってやることがいっぱいあるんだから、時間潰しには困らんさ）
と、おじいさんは思いました。確かにおじいさんには自分の食べる食事のお料理をしたり、広い庭の木や花々の手入れをしてやる仕事がたくさんありました。でも、どうしてか、何もやる気がしません。お料理も作る気がしませんでしたし、だいいち何も食べたくありませんでした。
どうしてでしょうか、おじいさんは何も手がつかず、食事ものどを通らず、たださゆりのことばかり考えているのでした。思い出すのは、さゆりの笑顔や、言葉や、とても素敵だった踊りのことばかりです。
（これは困った。いっそ、また会ってしまえば気が済むに違いない。だが、もう1日くらい我慢しよう。なに、やることはいっぱいあるさ）
そうおじいさんは思うのですが、結局何も出来ないのでした。
唯一出来たことはパイプたばこを吸うことです。

おじいさんはさゆりのマッチを伏せて見ないようにしながら、宝箱の中から他のマッチを探しました。
一つ、日本の女の子のマッチを見つけました。年頃は小さいのに、きれいな着物を着て、髪をそれはきれいに結い上げています。そして、なぜか両手を袖の中に隠していました。
おじいさんはそのマッチを擦りました。マッチの明かりの中に現れた女の子は、何だか浮かない顔でうつむいていました。
「こんにちは、きれいな着物のお嬢さん。なんで両手を隠してるんだい？」
おじいさんが話しかけると、それでも愛想笑いをして女の子も答えました。
「こんにちは、旦那さん。私は舞妓なの。芸者の見習いなのよ。手を隠しているのは“見習いだから、お酒のお酌はしません”って言う意味なの」
「ほう、じゃあ、君もお座敷に行くのかい？」
おじいさんは言いながら、慌ててマッチの火をロウソクに移しました。“芸者”と言う言葉に惹かれたのです。
「そうよ、旦那さん、お詳しいのね」
「いやいや、詳しくなんかないけれど、この間さゆりという芸者に会ってね」
「さゆりねえさんに？　ほんと？……まあ、」
さゆりの名を聞いて、女の子はビックリし、そしてぽろぽろ泣き出してしまいました。
「どうしたの？　さゆりを知っているのかい？　なんで泣いているの？」
「さゆりねえさんを知らない人はいないわ。写真も売り物になっているし、長唄のレコードだって出ているのよ。マッチの絵にもなったわ」
おじいさんは伏せているさゆりのマッチをそっと見ました。でもすぐ女の子に目を合わせて慰めようとしました。

「そうかい、さゆりはそんなに人気者なんだね。じゃあ、君はなんで泣いているの？」
「それは、私がこの間、さゆりねえさんに恥をかかせてしまったからなの」
「さゆりに？　どういうことなのかな。良かったら詳しく聞かせてくれないかい？」
　女の子はぐすぐす泣きながら、しばらく黙っていましたが、おじいさんが「内緒にするよ」と言うと、ようやく話し始めました。
「あのね、ほんとは言っちゃいけないことなの。内緒にしてね」
「もちろん、約束するよ」
「……この間、さゆりねえさんと一緒のお座敷に私も呼ばれたの。さゆりねえさんがお客さんの前で踊って、他のねえさんが長唄を歌って、三味線を弾いたの。私は鼓をうったの」
「鼓というのはその楽器かな？」
　おじいさんは女の子が手に持ってみせた楽器らしきものを指さしました。どうやら小さい太鼓のようです。
「そうよ、肩に乗せて手でうつの。そしたら、私、これをうち間違えちゃって……そしたら、」
「そしたら？　どうしたの？」
　女の子はまたぽろぽろと涙をこぼし、言葉をつかえました。
「よしよし。泣かなくっていいんだよ。なに、楽器の演奏を間違えるなんてよくあることさ。君はまだ小さいんだし」
「そうじゃないの。私が鼓をうち間違えたら、酔ったお客さんが「さゆりが踊りを間違えたぞ！」って大声をあげて、さゆりねえさんを笑いものにしたのよ。違うの、間違えたのは私なのに。お客さんがあんまり笑うものだから、踊りも歌も半端で止まってしまって……」
　おじいさんはその光景が頭に浮かんで、一瞬声が出ませんでした。
　女の子も、あ～っと声を上げていっそう泣いてしまいました。
「それは、ひどい。ああ、泣かなくていいんだよ。君のせいじゃな

い。それは酔ったお客さんのたちが悪いんだ」
「そうかもしれないわ。でも、さゆりねえさんは踊りを台無しにされたのに、笑いながらそのお客さんにこう言ったの。
「まあ、大変なお目利きさんに見つかりましたわ！　私、上手くごまかしたつもりでしたのに」
　って言ったの。それで、そのお客さんにお世辞言って、お酌までしてご機嫌を取ったの」
「それは、くやしいね」
「ええ、くやしいわ。ねえさんはもっとくやしかったと思うわ」
「きっとそうだろう」
「でも、私、怒られなかったのよ。それでよけい申し訳なくて」
「それはね。きっとさゆりも小さかった頃、演奏を間違えたことがあったからだと思うよ。何でもはじめから上手な人はいやしないからね」
「そうなのかしら」
「きっとそうだよ。だからね、君もお稽古をしているうちにきっと間違えないようになるさ。それに、そのことはお客さんのほうが悪いんだからね」
「ほんとは、お客さんのことを悪く言っちゃいけないの」
「そうかい、そうかい。じゃあ、本当にこの話は内緒にしよう。安心しなさい」
「何だか、少し気が済んだわ。ありがとうございます、旦那さん」
　女の子は涙をぬぐって頭を下げると、お座敷に出なきゃと言うので、そこで話はおしまいにして、おじいさんはロウソクの火を吹き消しました。

　明かりが消えると、部屋は薄暗くなっていました。
　でもおじいさんはただじっとして、今の話を思い返していました。
　おじいさんは、はらわたが煮えくり返るような心地がしていたのです。自分のことではないのにくやしくて仕方がありませんでした。

（酔っ払いめ！　さゆりを笑いものにしただと？）
許せなくて、くやしくて仕方がありませんでした。でも、さゆりのように酔ったお客さんを相手にしている人には、こんなことはきっとよくあることに違いありません。おじいさんはそう思い、やるせなく、いつもは飲まないお酒を飲みました。でも、ちっとも美味しくないし、気分が良くなりません。
（どうしたら、さゆりを慰められるだろう？）
そう考えても、何も良い案は浮かばないのでした。

結局その日も、また次の日も、おじいさんはさゆりのマッチを擦りませんでした。
ただ、お酒を飲んで、ふさぎ込んでしまったのです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5114f/

おじいさんと不思議なマッチ箱

2010年10月30日21時25分発行